



143号

2009/5/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「ネゴンボの魚市場で」(写真説明:11p) 於:スリランカ・ネゴンボ 2007年7月撮影 日本スリランカ文化交流協会・代表 為我井輝忠

‘わんりい’143号の主な目次

北京雑感 (34)「季節の変化」	2
私の調べた四字熟語 (32)「流言飛語」	3
物知りノート (8) 端午節とチマキの由来	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	5
中華チマキの作り方	5
関帝さまゆかりの塩～中国の死海・運城の塩湖～	6
媛媛講故事 (13)「梁山伯と祝英台」I	8
中国を読む (番外)「空の民の子どもたち」	9
四姑娘山・写真便り (18)「女王谷の言葉」	10
5月の歌・歌詞	11
スリランカ紹介 (28)「ジャフナ珍道中Ⅲ」	12
私の四川省一人旅 (24) 垂丁 11	14
アフリカとの出会い (32)「変わらない家族の姿」	18
わんりい’掲示板	19・20

♪「中国語で歌おう!会」5月の歌 ♪

shìshàng zhīyǒu māma hǎo
「世上只有妈妈好」

作词:蔡振田 作曲:林国雄

5月は、中国映画の主題歌として歌われた可愛らしい童謡を歌ってみましょう。(歌詞 11p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩 2分、小田急線南口徒歩 5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

5月22日(金) 19:00～20:30

指導:趙鳳英 (中国人歌手)

録音機お持ちの方は、ご持参下さい

●ご予約ください!

「中国で歌おう!会」 6月の講座日は
6月19日(金) 19:00～20:30です

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局 (☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

今年は、日本各地で、4月初旬というのに、真夏日と言われる最高気温30度寸前の気温を記録する日が何日もあり、「観測史上初」とか「2番目」とかの文字が新聞紙上を賑わせました。満開の桜の下を半袖のTシャツで、日差しを遮りながら歩く若い女性の映像がテレビに映し出されたりもしました。

こんな光景を見ながら、私は、初めて北京で過ごした時のことを思い出しました。私が初めて滞在を予定して北京に出かけたのは、1999年4月初め、清明節の頃でした。成田では厚手のコートを手織りして出発したのですが、北京に着いて10日もすると、そんなコートが邪魔に感じられるようになりました。旅行で晩秋の北京に出かけた時、北京の秋は日本の秋よりも進行が早いと感じましたが、春も同じでした。まだ4月中のある日、急に気温が上がり、暖かいのを通り越して暑くなりました。さすがに陽が落ちると涼しくなりましたが、その涼しさを心地よく感じる程、日中の暑さは強烈でした。

日本では、春先、たまに暑い日があっても、1日か2日で元に戻り、徐々に暖かくなってやがて梅雨入りし、7月に入ってから梅雨が明けて、いよいよ夏到来となりますね。最近では気候が不順とは言っても、凡そこのパターンで夏がやって来ます。

北京で初めて4月の暑い日に遭遇した時、この暑さは2日か3日で終わり、またセーターが丁度いい気温になるのだろうと思いました。ところが、日中のこの暑さはそれから毎日続きました。気温が何度だったのか正確には分かりませんが、初めての私にとっては、昨今話題になっている、「真夏日直前——つまり30度近い温度」に感じられました。ですから、今年の異常に暑い日を体験して、「北京の春はいつもこんな様子だ」と懐かしく思い出しました。

「北京には春が無い」とは以前から聞いていましたが、このとき実感しました。この急な暑さに私はビックリしましたが、北京の人々には何の不思議もないことのように、暑くなったその日から、半袖や袖なしを着て颯爽と街を歩いていました。しかし、日中は真夏と同じような服装ですが、夜になるとそのままでは薄ら寒く感じるので、皆さん上着を用意していました。冬の寒さが終わると直ぐに日中の暑さがやってきますが、北京の季節の移ろいは夜の気温で感じます。4月の夜はしっかりした上着が欲しくなりますが、5月には薄手の上着、6月からは何も要らず、夏になったと感じます。

北京で初めて体験した春の到来は、非常に印象的でしたが、その後の体験から、北京の季節の変化は、どれも急激でキッパリしていると感じました。前にも書きましたが、7月の終わりごろ、日本と比べれば凌ぎ易いけれど、

やはり厳しい暑さに氣息奄々としていた時、古老の「あと10日もすれば秋がやってくる」と言う一言に、信じられない思いでしたが、果たして、8月の10日過ぎには朝夕急に涼しくなって来ました。日中の暑さは、7、8月も9月も変わらないのですが、陽が落ちてからの温度が段々に低くなり、10月のある日、前日と同じように晴れていても、急に寒くなります。

日中だけを見ると、夏から急に冬になるような印象を受けます。これが、北京には春(秋)が無いといわれる所以でしょう。初めて北京で1年半を過ごした時は、その間の季節の移り変わりが全て新鮮で、東京との違いばかりが目につきました。夏も、気温は高く、35度以上の所謂「猛暑日」が続きましたが、空気が乾燥しているので、日陰ではホッと一息つけて、気温の高いわりには楽でした。私はそんな北京の夏が好きだったので、この10年の間に、北京の夏が変わったような気がします。

以前、北京の夏は雨が非常に少なかったと思います。午後、何の前触れも無く、急に文字通りバケツをひっくり返したような夕立が降り、小一時間で止むのを何度も経験しましたが、梅雨のある日本から行けば、降水量はともかく、雨としては無いに均しい印象でした。それが、4年ほど前の夏のある日、朝起きたら、窓の外で雨がしとしとと降っていたのでびっくりしました。その年はそんな雨が何回か降りました。それと同時に、夏のさっぱりした暑さが影を潜めて、日本と同じように湿気を感じる暑さになってしまいました。それ以後、そんな夏が続くようになり、私にとって、北京の魅力が一つ消えてしまいました。

しかしながら、今も変わらぬ北京の魅力は、環状線の中央分離帯で今頃から咲き出す庚申バラ^注の花です。私は、北京の街角は花が少ないとの印象を持っていたのですが、分離帯のフェンスに絡まって咲くこのバラで、北京の街を見直しました。因みに、北京っ子はこの花をバラ(玫瑰)とは呼びません。月季と言います。私には原種に近いバラと見えるし、日本名も庚申バラというのですが、北京の人々は、「玫瑰(メイクイ)ではない、月季(ユエチー)だ」と言って譲りません。

名前はどれであれ、この花は花期が長く、11月でもまだ1輪2輪咲いているのを見たことがあります。そのせいか、北京の人々はこの花が大好きです。

注) 庚申バラ

学名は *Rosa chinensis*。植物分類学上、バラ科バラ属の植物で、野生のバラである。1986年にキクとともに北京市の花に指定された。



何か途方も無いような大きな災害に遭って、被災地の人心が乱れて混乱状態にあるようなときには、どこからともなく良からぬ噂が立ち、デマがまことしやかに飛び交い、それがますます人心を不安や恐怖に陥れることがあります。

そのような時には災害復興のリーダーが、「流言飛語に惑わされず、みんなで力を合わせて復興のために頑張りましょう。」と述べて被災者を励ますのを聞きます。

「流言飛語」は良く聞く熟語で、意味も周知かと思いますが、念のため辞書を確認しますと、

三省堂刊・現代国語辞典には
「流言飛語：世間にひろがるいいかげんなうわさ。」とあり、

小学館刊・中日辞典には「流言」の項に用例として「流言飞语 (liúyán fēiyǔ) 流言飛語。」と載っています。

この成語の出自は「史記・魏其武安侯列伝註」です。紀元前154年、漢朝の竇太后の甥の竇嬰はしかるべき功績によって漢の景帝によって魏其侯ぎきこうに封ぜられました。けれども景帝の皇后(王皇后)の親戚である田蚡でんぶんはその頃はまだ、郎官ろうかん(官職名)の職に留まっていました。

その後紀元前141年に景帝が亡くなって、王皇后は王太后となり、武帝が即位すると新たに田蚡が寵愛されるようになり、田蚡は武安侯に封ぜられました。

数年後竇太后が亡くなると竇嬰はかつての勢いを更に失ってゆきました。一方田蚡はますます勢力を増して宰相になり、王朝の中で権威を振るうものたちは皆田蚡にとりいるようになりました。それでも將軍かんぶの灌夫だけは依然として竇嬰と親密に往来していました。

紀元前131年、田蚡は燕王の娘との婚礼の宴を催しました。皇帝の一族や大臣たちは皆、その宴に出席し田蚡の結婚を祝いました。宴席で田蚡が乾杯を呼び掛けると客人たちは皆次々と床に伏して敬意を表しました。しかし、竇嬰が乾杯の呼びかけをした時は、ごく少数の旧知のものだけが同調しただけで他

の人は全く我関せずといったありさまでした。

灌夫はこの様子を見ると憤慨し、大臣達が権威や金銭になびく行為をはげしく非難しました。田蚡は自分が招いた客人を灌夫がののしるのを見て怒り、灌夫とその一族を捕らえました。竇嬰は漢武帝に灌夫を容赦するように頼みましたが、一方王太后は田蚡を支持するように武帝を責め立てました。武帝は結局、將軍竇嬰をも捕え、同時に灌夫とその一族を全員死刑に処することを言い渡し、家財を全て没収しました。

捕えられた竇嬰はこのことを伝え聞くと自殺をしようと食を断ちました。しかしほどなくある人が“武帝は竇嬰を死なせたくないと考えている”と伝えました。自殺を思いとどめた竇嬰はその後食事をとれるまでに快復しましたが、この頃彼を陥れるための全く根拠のない多くの噂話が宮中で飛び交っていました。

武帝はこれらの話を全て真に受けて、怒りから將軍竇嬰を処刑してしまいました。かくして流言飛語が竇嬰を死に至らしめたのです。

〈注記〉

史記：中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。正史の第一に数えられる。二十四史のひとつ。計52万6千5百字。著者自身が名付けた書名は『太史公書』であるが、後世に『史記』と呼ばれるようになるとこれが一般的な書名とされるようになった。「本紀」12巻、「表」10巻、「書」8巻、「世家」30巻、「列伝」70巻から成る紀伝体の歴史書で、叙述範囲は伝説上の五帝の一人黄帝から前漢の武帝までである。このような記述の仕方は、中国の歴史書、わけても正史記述の雛形となっている。魏其武安侯列伝は列伝70巻のうちの第47巻。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

【'わりい'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報 'わりい' は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。



端午の節句といえば関東では柏餅ですが、関西ではチマキ(中国では粽子=zongzi)が一般的です。

チマキは上新粉ともち粉とをあわせて作った生地を熊笹の葉でく

るみ、い草でぐるぐる巻いて蒸したものです。日本の食文化は中国から伝えられたものが多いのですが端午の節句には欠かせないこのチマキも中国から伝えられました。

BC278年旧暦5月5日屈原くつげんという詩人であり政治家であった人物が自分の楚の国が秦に侵略されたのを悲しんで汨羅江べきらに身を投げました。端午節とは人々が屈原の死を悼み、亡くなった5月5日を記念して始まりました。

中国各地の端午節の風習は門前に菖蒲とよもぎをつるす、匂い袋を身につける、ドラゴンボートレースを催す、雄黄酒注1)を床にまく、菖蒲酒注2)を飲む、塩卵、チマキ、果物を食べるなど様々です。

屈原は春秋時代の楚の国の大臣を務めた人物で、その広い学識から楚の懐王の信頼を得たのですが、貴族たちの嫉妬による流言を信じた懐王から任を解かれ追放されてしまいました。流浪の身となった彼は国と民を憂い「離

騷」などの詩を詠みました。

BC278年、楚国は秦に首都を攻め落とされ、自国が侵略される様を見て屈原は絶望し、遺作「懐沙」を遺し、石をかかえて汨羅江に身を投げたのです。屈原を愛していた民衆はこぞって汨羅江に行きました。漁師達は船を出し遺体を探しました。魚が腹一杯ならば屈原の遺体を食べることはないだろうとにぎり飯や塩卵を河に投げ込みました。

にぎり飯を投げ込む風習はその後龍がにぎり飯を食べてしまわないようにセンダンの葉でくるむようになりしました。これが今のチマキになったといわれています。

又端午節には中国各地でドラゴンボートのレースが賑やかに開催されますが、これは多くの人々が入水した屈原を求めて小船に乗り込み捜し求めたことに由来するといわれています。人々は屈原の遺体を探すために川に船を出しましたが、しかし遺体は見つかりません。屈原の体が川の中で魚の餌になるのはしのびないと考えた人々が、船から太鼓を叩くなど大きな音を立てて魚を追い払いました。

加えて5月は気温も高くなるため、自然界の気が盛んになるとともに害虫などが出てきますのでこれにさされたり、体調を崩したりすることも多い季節ともいえます。その為古くから無病息災を祈念する行事がおこなわれていました。端午節とこれらの行事が結びついて前述の様な様々な邪気払いの習俗が端午節に加わっていったと考えられます。

端午の節句は旧暦5月5日は今年5月28日だそうです。

■注記

1) 雄黄酒：雄黄=鶏冠石の粉末と蒲の根を刻んで焼酎に入れたもの。中国の端午節にはなくてはならないもので、部屋の掃除をしたあと床に撒きます。民間のことわざ「雄黄酒をまくと、虫が遠くへ逃げる」とあります。

また、龍が屈原を傷つけないようにと「雄黄酒」を河に流し、龍を酔って寝かせようとしたとも伝えられています。

2) 菖蒲酒：菖蒲(しょうぶ)を徳利や銚子に入れて酒にひたしたものです。さわやかな香りがあり、邪気を払うといわれる。

●参考文献：インターネットフリー百科事典 Wikipedia 他



虎の形の可愛い香袋。首にかけたり持ち物に付けたりする。



中国のチマキ



掛け声も賑やかなドラゴンボートレース

【中華チマキの作り方】

岡村さんの端午節のお話を読んで思い出しました。まだ会の活動が始まって何年も経たないころ、在日の中国の皆さんにお願いして、盛んに中華料理の講習会をしていました。これから紹介するチマキは、お母さんが四川省出身で、北京は精華大学出身という才媛の張友群さんが、中国のご自分の家でよく作るというチマキです。

中華チマキは、地方地方でいろいろな作り方があるようで、中に入れる具も作り方も様々です。スーパーなどで売っている中華チマキは竹の子の皮で包んでありますが、友群さんは巾が7～10cmもあるような大きな笹の葉を使いました。

この笹の葉は手近で手に入りやすい竹の子の皮でもよいですし、中華街などでそれほど高くなく売っていますのでついでのときに購入することが出来ると思います。

〈材料〉

- ▶もち米 500g (約10個分)
- ▶蜜ナツメ 10個 (半分に切る)
- ▶中華腸詰 1～1.5本 (5～6mmの小口に切る)
なければ、鉛筆状の細いサラミを使っても良いかも。
- ▶漉し餡 半カップ程度
- ▶笹の葉(チマキ用として乾燥してある)20枚(2枚で1つ分)

〈作り方〉

①笹の葉を水に30分くらい漬けてから、20分ほど茹でて水分を拭きとって置く。笹をゆでた汁は捨てないで取って置く。

②もち米は5、6時間～1晩水に漬けて置く。

③もち米とその他の材料を10等分しておく。

①で用意した笹を丸めて、三角錐(すい)状のくぼみを作り、もち米(1つ分の半量)、ナツメ、腸詰、餡を入れ、残りの半量を上に被せる。それに適量の水を掛けて三角形に包む。

もう1枚の葉で形を整え紐で結ぶ。

④笹をゆでた湯で1時間ほど茹でる。

出来上がったチマキは冷凍も可能なので、多めに作って保存しておくことが出来る。

私の感じでは甘過ぎるように思うので、詰める具を好みで調節すればよいのではないかと思います。

余談ですが、和光大学経済学部助教授のバンバンルディアント夫人のロサリタさんにインドネシア料理を紹介いただいた際、インドネシアにもレンベルという名前で、チマキがあることを知りました。

こちらはもち米にココナッツミルクを入れて炊き上げ、鶏肉や玉葱その他を炒めて作った具を小さな俵型お握りの中に包み込みます。仕上げはバナナの葉で包み、いかにも南洋風のチマキでした。(田井)

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

万緑や風のそよぎに聞く鼓動

wàn mù yī cōng lóng
万木一葱茏

bīng xī líng tīng xì wēi fēng
屏息聆听细微风

xīn cháo zài gǔ dòng
心潮在鼓动

季语：万木葱茏、夏。

赏析：秩父市位于日本埼玉县盆地、是坐历史文化名城、12月的秩父神社尤为有名。

在苍翠连天的秩父路上、周遭幽静沉积、作者屏息凝神、从视觉转为听觉来享受这美不胜收的景色——是微微吹来的柔风的沙沙声吗？还是自己的心儿在鼓动？此时此刻、作者既已融化在洁净的大自然中了。

竹落葉水面を渡る風柔らかし

zhú yè luò líng sǎn
竹叶落零散

qīng qīng piāo fú dù shuǐ miàn
轻轻飘浮渡水面

xì xì qīng fēng ruǎn
细细清风软

季语：竹叶落、夏

赏析：寒山寺前有条河、水面浮着竹子的落叶、一阵柔风吹起、那落叶向彼岸渐渐飘去。本首俳句的弦外之音、是句中没名写的河水平静。如若风强波起、那竹叶是不能飘渡水面的。

读完此句、那江南水乡的风韵犹如录像一样活生生地展现在我们面前、令人心驰神往。

関帝様ゆかりの塩

岩田温子

～ 中国の死海 運城の塩湖・解池(xiè chí) ～

山西省の南部、黄河に近い中条山脈の北側に运城という市があります。市内には、唐代に創建され、池の神と太陽と風を祀った池神廟があります。歴代皇帝が塩業の隆盛を祈願しにやってきたという由緒ある廟ですが、ここからは白い堰堤のように塩が堆積している様子が一望できます。これが、南北が約4km、東西が約30kmの解池(xiè chí)*という塩湖です。

*解池：(jiè chí) ではないので注意

内陸にあるこの解池は古代から人々にとって欠かすことのできない塩の供給源として大変重要なものでした。今は食用塩の生産は行われず、工業用に使われるだけになってしまいましたが、数年前に、湖の底に沈澱している泥を利用した健康施設が湖の中程に作られました。

泥に含まれている微量の重金属や元素が皮膚の新陳代謝を促し、血液の循環を良くし、免疫力を高めるなど、なにやらありがたい効能がたくさん挙げられています。去年、旅の途中でそうとは知らずに立ち寄り、疲れが癒され、おまけに肌がツルツルピカピカになったのに味をしめ、今年もまた友人たちと訪れました。

湖に張り出した道の突き当りにドーム型の建物があり

ます。その手前には湖を区切って作った遊泳場があり、5月から9月まではその中で浮いて楽しむことができます。「浮いて」というのは、この湖の塩分濃度が普通の海水の約6倍もあり、水中で体が沈まず、楽に浮いていられます。成分的にも、イスラエルの死海と同じようなので、「中国死海」と呼ばれています。私たちが訪れたのは2月初めでしたので、ドームの中の施設に入りました。

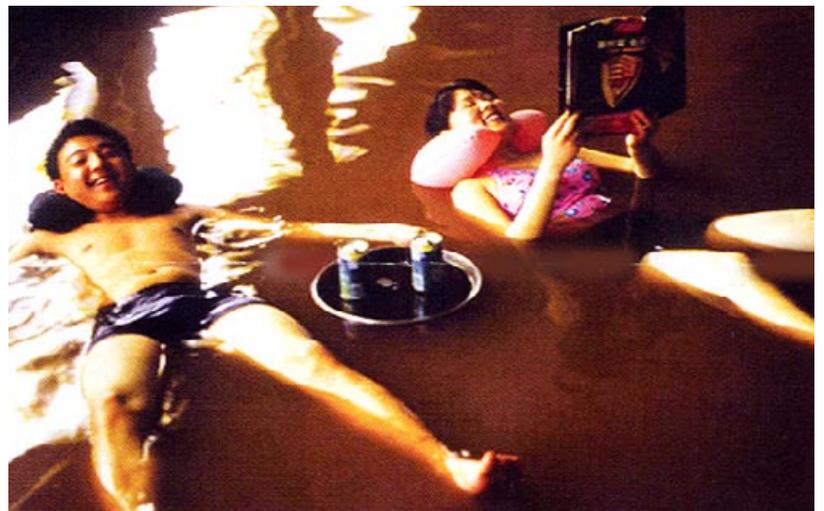
ドームの中には塩の温泉、死海体験、泥浴の三つの施設があります。まず入場料を払い、さらに利用する施設の数に応じて料金を払います。幸い冬季割引料金で、一人につき合計208元(約2,912円)を支払いました。

受付で料金を払い、靴を預けてサンダルに履き替え、ロッカーの電子キーを受け取って更衣室に行きます。更衣室では若い女性係員のこやかで元気な声が迎えてくれ、ロッカーへ案内をされ、キーの使い方を教えてくれました。

旅行中はパスポートや所持金の安全が気に掛かりますが、ここではそういう心配もなさそうで安心しました。持参した水着、帽子、水中メガネを着用し、係員が渡してくれたバスタオルを羽織るとまず塩の温泉に案内さ



解池風景



屋内で浮遊体験ができる設備。世界最大という謳い文句の、面積1800m²。一度に千人が入館できる



季節の良い時は外にあるこちらの施設で浮遊体験

れました。

室内には大きい円形のプールのような浴槽があり、温度はぬるめの39度ぐらいに感じました。浴槽の中の縁に沿ったところには打たせ湯やジャグジーなどの設備があります。ぬるいのでゆっくり長く入っていられますが、もう少し熱めのお風呂のほうがよければ、隣の施設につづく出口手前の岩風呂をお勧めします。それぞれ泉質が違う42～3度の岩風呂がいくつか並んでいます。岩風呂を出ると係員がバスタオルを持ってやってきて、次の部屋へと案内をしてくれました。

次は湖の塩水がはられたプールで死海体験です。室内は、砂を敷いた床や椰子などの木で南方のリゾート地風の設えになっていて、そこに深さが腰ぐらいの大きな円形プールがあります。部屋に入ると係員が首にはめて使う空気枕を渡してくれました。それから、ゆるいすり鉢状に傾斜したプールの縁に腰をおろし、塩水が跳ねて目に入らないよう、ゆっくりと手と足でズリながら入るように身振り手振りを交えて指示されました。塩分が濃いので、目に入るとかなり痛いようです。

塩水は赤っぽい泥のような色で、中に入ると自然と足が浮き、適当なところで頭を枕に預け、身体を横にし、仰向けになりました。ドーム状の天井には青い空と白い雲の絵が描かれていて、天井の青い空を眺めながらしばらく浮いてみましたが、プールの中ではすぐに飽きてしまいました。一時間ぐらい浮いていると、塩水の中の栄養分を身体の中に十分吸収することができるそうですので、次に行く機会があれば忘れずに本を持ってゆき、ゆっくり死海体験を楽しみたいと思います。水温は温泉ほどではありませんが、冷たくはありませんでした。

最後は泥浴です。プールに湖の底から掬いだした泥が浅くはられています。ちょうど田んぼの粘土質の泥のような感触です。その中に座り込み、泥を掬っては顔や身体に塗りました。泥をよく塗り込んだ後、サウナのような部屋に入りました。壁に沿ってベンチがあり、そこにじっと座って泥の成分がさらによく身体にしみこむのを待ちます。

長ければ長いほど効果はあるのですが、高温と高湿度で15分ぐらいがやっとでした。その後はシャワーを浴びて泥を落とします。あらかたの泥が落ちたところで、さらに更衣室に続くシャワー室に入りました。

浴用タオルをもらい、石鹸やシャンプーなどで頭や身体を洗い、その後更衣室で髪を乾かし、服に着替え、外に出ました。入場をしてから約2時間でしたが、それぞれのプールの周囲にはイスとテーブルがあり、簡単な飲み物や食べ物が売られていますので、もっと長い時間を過ごすこともできます。

館内での飲食や買い物の支払いはロッカーキーをフロントに返す時にします。ここには水着や帽子、水中メガネも売っていますので、何の用意もなく行っても心配はいりません。中国語ができなくても、係員の対応が気持ちよく、色々なことを先立って案内をしてくれましたので、これも心配はいりません。

私たちが行ったのは春節休暇の最中でしたが、夕方の4時に入場をしたせいか、大方の客が出て行ったあとで混み合うこともなく、ゆっくりと入ることが出来ました。おかげで、すっかり疲れがとれ、後半の旅が楽になりました。顔もツルツルピカピカになりましたが、この後黄砂にまみれ、すぐに元のカサカサ肌に戻ってしまったのは残念です。

この解池のある運城市には中国最大の解州関帝廟と関羽の両親や先祖を祀った常平関帝家廟があることで有名です。関羽は运城郊外の常平というところで生まれ、長じてこの解池から取れる塩の闇商人になったといわれています。関羽のいた漢の時代、塩は国の大事な税収入の源として製造、運搬、販売が厳しく統制されました。しかし、国庫を潤すために次第に質の悪い塩を高く売ようになり、民衆は苦しめられました。人々は当然安い塩を求め、ここに義の人・関羽の活躍する場があったということでしょうか。運城市は西安や河南省の洛陽、鄭州から高速道路で2～3時間で来られるという近さです。古代中国の遺産や遺跡の多いこの一帯は私の好きな場所ですが、新しい楽しみを見つけた感じです。

梁山伯と祝英台の物語は中国四大物語の中の一つに数えられています。古くから人々に親しまれ、芝居、映画、音楽、絵画などいろいろ中国文化に強い影響を与えています。

約千五百年前、東晋の時代、浙江省の上虞地方に祝という員外(昔の官名)の家がありました。その家には17歳になるたいへん綺麗な娘がいて、名前は祝英台としました。祝英台は旺盛な向学心から杭州へ行って学問をしたいと願っていました。しかし、当時は「女性は無才が徳だ」といわれるような時代でしたので、女性である祝英台が家を出て、しかも男性と一緒に勉強するなどということはとても難しいことでした。

祝英台は自分の強い希望を何とか叶えたいと思い「私は男装して行きます」と親に言いました。が、親はやはり承知してはくれませんでした。祝英台は庭から鮮やかに咲く牡丹を1本切って花瓶に挿し、親に次のように言いました。

「この牡丹の花を見守ってください。私が帰ってくるまで、この牡丹は鮮やかな美しさを保って咲き続けます。それは私が身を清く守っているという証です。もし私が身を守ることが出来なければ、この牡丹はきつと萎れてしまいます」

親はその言葉を聞いて祝英台の固い決意を知り、仕方なく娘の願いを承知しました。伝説によりますと、花瓶に挿された牡丹の花は、本当に祝英台が帰ってくるまでずっと鮮やかに咲き続けていたそうです。

祝英台は男装をし、杭州へ向いました。途中、会稽から祝英台と同じように遊学のため杭州へ向う梁山伯という青年に出会いました。二人は旧知の如く意気投合して義兄弟の契りを結び、一緒に杭州へ向かうことにしました。

夜、旅館に泊まることになりました。しかし、寝室に寝台は一つしかありません。旅の疲れで梁山伯はすぐ寝てしまいましたが、真夜中に目を覚ますと祝英台は

まだ灯火の下で本を読んでいます。

梁山伯は
「一日中歩き続けたのですから早く寝なさい」と祝英台に言いました。しかし祝英台は
「大丈夫だ。私は寝ないつもりだ」と答えました。
「どうして？」



「寝ている間に誰かに体をぶつけられると、頭がひどく痛くなるからなのだ」

「それなら、私は気を付けて体をぶつけない様にします。早く寝なさい。明日はまた旅を続けなければいけないのだよ」

「じゃ、寝台の真ん中に水を入れた茶碗を置いて貰えるだろうか」

「いいとも、それなら茶碗をもって来るさ」

梁山伯は茶碗に水を入れて、床の真ん中に置きました。そこで、祝英台はやっと安心して横になりました。

「どうして服を脱ぐないのだ？」

「や、兄貴には分からないことがあるのだ。私は幼いときから体が弱く、寒がりやで、母親は100個ものボタンがある特別な服を作ってくれた。面倒くさいから普段は脱がないのさ」

「あ、そういうことか」と真面目な梁山伯は信じた。

それから、梁山伯と祝英台は同じ寝室、同じ寝台で寝ましたが、梁山伯は祝英台が女であることに全く気付きませんでした。

そして旅を一緒に続け杭州の学校に着くと二人は先生のところに挨拶に伺いました。その折の祝英台の歩き方が先生の目を惹きました。その後、祝英台が他の生徒と一緒に絶対には絶対にトイレに行かないこと、暑い季節でも薄着をしないことなど、折に触れての微妙な立ち居振る舞いから、先生は祝英台が女性だと確信し、先生はトイレ使用に当たっての次のようなルールを学生たちに言い渡しました。

「トイレに行くときは、これからはトイレの門に板戸を立てかけ一人一人別々に行きなさい」

学生たちは何で先生がそのようなルールを決めたのかその理由を理解できませんでした。しかし先生の話は守るしかありません。先生の配慮で祝英台はトイレの問題を解決することができました。

梁山伯と祝英台は三年間、共に学び、お互いに労り合い、助け合い、親友としての友情をますます深めてゆきました。けれども梁山伯は祝英台が女性であることに気づくことはありませんでした。

そうして三年経ったある日、祝英台の元に親からの手紙が届きました。話したい重要なことがあり、早く家に帰って来てほしいというのです。

祝英台は梁山伯と離れがたくはありましたが、一方、三年間一度も親の顔を見ていませんでしたのでその手紙を読むと懐かしさで胸がいっぱいになりました。加えて子どもは父親の命令に背くことはできません。あれこれと考えた末、祝英台は帰郷することを決めました。

(続く)

‘わりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

毎年、4月は‘わりい’おたより会費更新の月です。

おたより会費は主として、おたよりの制作費及び送料として充てられますので、継続会費(1500円/年)の納入(上記)はできるだけ3月いっぱいをお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。

- ・入会はいつでも歓迎しています。
- ・入会すると‘わりい’の全ての活動に参加できます。

活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPでご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

中国を読む(番外)

「空の民の子どもたち

— 難民キャンプで出会ったラオスのモン族 —

安井清子著

(社会評論社)



就職活動をしている頃、出版社へ片っ端から手紙を送っていたら、一社だけお返事があった。児童書の出版社だった。

社長自ら筆を取ってくださった手書きのお葉書には、新卒の採用がないことを丁寧に詫言ったあとで、「子どもたちの未来を考えると、将来の地球の幸せを考えるとだ

と書いてあった。

安井清子さんの「空の民の子どもたち」を読んで、子どもたちの未来の幸せは将来の地球の幸せに繋がるのだと、そのお葉書を思い出した。タイの難民キャンプでともに過ごしたモン族の子どもたちとの思い出を綴った1冊は、それぞれ自分の道を歩きはじめた子どもたちの幸せを願って終わる。子どもたちのこれまでの

苦労は複雑な戦争によって引き起こされ、これからの幸せは地球の平和とともにある。あまりに大きなものに巻き込まれ振り回される子どもたちを前に、安井さんは何度も無力感を感じている。

安井さんの静かな強さは、この無力感と闘いながら、自分のできることから誠実に実行してきた経験から湧き出ているのだと思う。難民キャンプで絵本を読み、お話を作り、人形劇をやった子どもたちは、過酷な環境のなかでもたくましく育ち、現状を見据え自分の考えを持った大人へと育っていった。そして、現在も安井さんの活動は着実に実を結びつづけ、地元の人々に受け入れられている。ひとつの活動が応援する人たちの輪を広げ、次の活動の力となる。ひとつの使命を与えられた人の生き方がここにある。

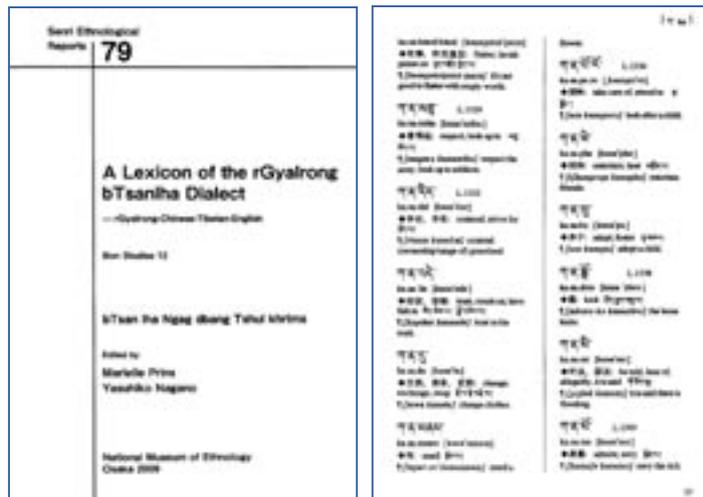
自分にできることから始めればいい、というひとつの考え方は私にも勇気をくれる。仕事場で回ってくる募金箱へのささやかなカンパ、コンビニで返ってきたちょっとしたおつりをレジ脇の募金箱へ入れる。そんなことしかできないが、そんなささやかさの積み重ねだっとなにかの力になるかもしれないと、普通の人でしかない私は考える。

(真中智子)

ギャロン(かつてギャルモロン=女王谷と呼ばれた)は一般の人にはほとんど知られていませんが、チベット文化を研究する専門家の間では強い興味を持たれていて、最近、ギャロン語の辞書が日本の国立民族学博物館の研究成果資料として発行されました^{注)}。写真①②はこの辞書の表紙と内容の例です。これは四姑娘山や丹巴の一部等で最も広く話されているツァンラ方言のみの辞書ですが、「ギャロン語(ギャロン文字は無いのでラサ語の文字で表記)―中国語―ラサ語―英語」が併記されていて、A4版で厚さが4cm近くある本格的な辞書です。女王谷の言葉についてこれまで断片的にご紹介した事が有りますが、この機会にももう少し補足してご紹介します。

今では「ギャロン/rGyalrong」(中国語では「ジャーロン/Jiarong」)と呼ばれるこの地は、元々「ギャルモロン/rGyalmorong」と呼ばれ唐書には「東女国」として記録されています。「ギャルモロン」の地名とその意味「女王谷」はこの地の知識人の一部に今も継承されていますが一般の人には忘れ去られ、今では「ギャルモロン」から「ギャロン」即ち「女王の谷」から「王の谷」へ変わっています。

しかし信仰の中心として古代から広く崇められ今も伝えられているモルド山(写真③)の本来の名称「ギャルモ



写真①② ギャロン語(ツァンラ方言)の辞書の表紙(左)とその内容(右)、

モルド/rGyalmo-murrdo=女王の尖った岩)には「女王」の語が残り、知識人の一部だけでなく一般人の一部にも継承されています。

「ギャルモロン」が「ギャロン」に変わっていった時期は、18世紀中期に清朝の乾隆帝がこの地に進攻して覇権を確立した金川戦役以降のようで、女性の家督相続を公には認めなくなった事が契機だとする説が有ります。

ギャロンの地にはおおまかに言って互いにほとんど通じない3つの方言が有り、今日では多数派の方言を話す人達が自らをギャロンと称しています。この多数派(写真④)の方言が初めてご紹介したツァンラ方言です。多数派で且つ名称がギャロンなので、これらの人々が唐書などに記録された東女国の文化を特徴づける直系部族のように思いがちですが、色々な時代に色々な部族が移動した事による言語と文化への影響は複雑で、短絡的にそうとは言えません。

東女国を特徴づける政治形態や建築物はチベットの吐蕃王朝以前に広大な地域で長く栄えたシャンシュンからの移民がボン教と共にもたらしたものですが、このシャンシュンの言葉(ギャロンと同じくほとんど文字がありません)をもっとも残しているのは2番目に多く話されている丹巴中西部のゲシザ方言だとする説があります。またゲシザ南部にはギャロンで最も古い歴史(シャンシュンからの移民の頃)を持つと考えられるボン教の寺が残っていてこの説に符合しています。しかしこの地方は13世紀のモンゴルの進攻によって滅びた西夏からの移民が有ったとされる地域と重なるため西夏の影響の方に注意が集まりがちで、それ以前の古代文化には目が向かない傾向があります。

3番目の方言は丹巴中南部のソガ等で話されているもので、ラサの言葉に近いと言われていています。この周辺地域に



写真③ モルド山



写真④ ツァンラ地方の婚礼の宴席



写真⑤ 高い石積みの塔(古石碉)が残る特異な場所

住む人達は主に1000年位前に移民して来たとする言い伝えが残っていますが、その経路についてはハッキリしません。ただ大渡河源流部に位置するこの地域はモルド山の本来の名称「ギャルモ・モルド」が一般の人にも残っており且つ数多くの高い石積みの塔が残る特異な場所(写真⑤)でもあります。さらにこの地域の集落から離れた標高の高い所には特に立派な塔や要塞の跡が残り、東女国の遺跡だと信じている地元の人も居ます。

注) 今回の話しに少し関連しますが、今年の春から夏に掛けて東京と大阪でチベット文化を紹介する展示会や講演会が幾つも開かれます。その中で国立民族学博物館が1990年代後半からフランス・中国と共同調査したギャロンに関係深いポントの研究成果も紹介されます。機会がございましたら是非ご覧になって下さい。

国立民族学博物館の本稿関連ホームページは下記です
(<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/tibet/>)

- すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります……<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>
- 大川さんのホームページはこちら……<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>

a 中国語で歌おう!会〈5月の歌〉歌詞

shìshàng zhīyǒu māma hǎo
世上只有妈妈好

～电影〈妈妈再爱我一次〉主题歌～

作词: 蔡振田
作曲: 林国雄

shìshàng zhīyǒu māma hǎo
世上只有妈妈好

yǒu mā de hái zǐ xiàng gè bǎo
有妈的孩子像个宝

tóu jìn le māma de huái bào
投进了妈妈的怀抱

xìng fú xiǎng bù liǎo
幸福享不了

shìshàng zhīyǒu māma hǎo
世上只有妈妈好

méi mā de hái zǐ xiàng gēn cǎo
没妈的孩子像根草

lí kāi māma de huái bào
离开妈妈的怀抱

xìng fú nǎ lǐ zhǎo
幸福哪里找

□ 表紙写真の説明

ネゴンボの魚市場で

コロンボから北へ1時間ほどのネゴンボはリゾート地としてもよく知られたところですが、漁港でもあります。早朝市場に行くと、たくさんの魚が水揚げされ、すぐその場で売り出されます。

仏教徒は漁業に携わず、主にキリスト教徒が生業としています。市場ではもっぱら漁師の奥さんたちが魚を売りさばいています。(為我井)

※為我井さんは、スリランカの文化及び教育支援を目的とした活動を展開しており、その活動の折に撮影した写真をもとに、写真集「カメラを通して見たスリランカ」を今年1月出版されました。久美堂本店と西友町田店7Fのリプロで販売中です。

*定価: 1050円(税込み)

*問合せ: 為我井 ☎ 042-735-9583

クルネガラの子アムラダプーラ家を約1時間遅れの7時頃に出発してからアムラダプーラまで約2.5時間のドライブは順調でした。

アムラダプーラは2500年以上前にスリランカ最古の都が築かれた町であり、現在でも市街各所に遺跡が点在し、スリランカを代表する遺跡群である文化の三角地帯の中心地です。アムラダプーラの話は別の機会に譲って先に進みましょう。

アムラダプーラで30分ほど休憩しました。休憩した食堂の近くにも、インドのブッダガヤにあった菩提樹(この樹の下で仏陀が悟りを開いたと言われています)から分けられて紀元前3世紀に移植されたというスリーマハー菩提樹があったのですが時間が無くてお参り出来ませんでした。ここから先には休憩できるような店や売店があるかどうか判らないので、大急ぎで紅茶を飲みスナックを摘み、ミネラルウォーターとお菓子を買って、いよいよLTTEの支配地域への玄関口であるバブニヤへ向けて出発です。

バブニヤまでは30kmほどの道のりですが、交通量が急に減ってきました。アムラダプーラまでの道では、早朝だというのに上り下りの両車線ともに、通勤客をすし詰めにして車体を傾けながら走っていたバス、ちょっと割高な定員制のインターシティーバス、三輪タクシー、信号を無視して突っ走る高級官僚のものとおぼしき護衛付きの車列、運転手が見えない程あらゆる箇所に焼き立てのパンを山積みにして大音量のマイクで宣伝文句を流しながら走りまわるパン屋のオートバイ、新聞配達用のオートバイ、朝摘みの野菜を満載して市場へ急ぐトラック等で、渋滞するほどではありませんが混み合っていました。

道路の両側にある食堂や屋台で朝食のために群がっ

ている人達とおこぼれを待つ野良牛、側溝で水浴をしている老若男女で生活感に溢れ活気に充ちていたのに、バブニヤまでの道ではほとんど車が走っていません。この地域からは住民がいなくなってしまうようです。野良牛すら何処かへ行ってしまった様で、道路をうろつく迷惑者も見かける事はありません。

アムラダプーラまでは、ほぼ平行して走っていたスリランカ国鉄の線路はアムラダプーラの町を出てしばらくすると枕木だけを残してレールが取り外されています。線路に沿って立てられていた電柱には電線が切れて垂れ下がったままです。駅舎や橋梁は焼き払われているか、破壊されたままの場所が多くあります。客車も数多く放置され弾痕が残っています。これまでは冗談ばかり言っていた友人達もめっきり口数が少なくなり、破壊された構造物や客車がある毎に指差してシンハラ語で何か呟き合っています。

この地域は紛争の前は豊かな農作地帯だったそうですが、紛争が始まってから農地は放置されて現在は荒れ放題です。勿論、農民の姿を見ることはありません。以前は農家だったと思われる場所には土台だけが残されていました。道路脇にあるコンクリート造のバス停留所には銃弾で削られた痕が残されています。客車までは距離があったので実感が伴わなかったのですが、バス停は目の前にあるので生々しく感じられます。LTTE(タミール・イーラム解放の虎/the liberation tigers of Tamil Eelam)の支配地域にはまだ入っていませんが、休戦前は戦闘地域だった場所に踏み込んだ事がひしひしと感じら、こんな場所に興味本位の浮かれ気分であつたのは拙かったです。1時間ほどでバブニヤの町の外れにあるバンニのチェ



ックポイントに着きました。この時点で既に午前11時になっており、予定時間を1時間30分遅れています。制限地間の午後5時まで約150kmあるLTTEの支配地域を抜ける事が出来るのか先行きが不安です。

最初は政府軍のチェックポイントです。政府軍の兵士達からは休戦になったという安堵感からなのか、銃を携えて遮断機付近を警戒している兵士を除いて最前線という厳しさは感じられません。制服を着た兵士達があちこちらに集まって何事が談笑しています。

管理事務所では心配していた書類検査も、書類が無いという事ですったもんだしましたが、ジャフナに駐留しているというカルナラトネの親戚の政府軍幹部名を出した途端に簡単にパスしました。後は僕のパスポートと名刺を確認し、友人二人のIDカードを見ただけですんなりと通過許可書が発行されました。

本来ならば、乗ってきた車の検査だとか、持ち物検査などがある筈なのに行われませんでした。LTTEの支配地域には持ち込みが禁止されているアルコール類をお土産として隠し持っていたので冷や冷やしていたのでラッキーでした。最前線なのにこんな事で大丈夫かと思ったのですが、これは僕が外国人だったための特権でした。紛争中にジャフナから脱出した人の里帰りや、ジャフナに物資を運んで一儲けしようとする輩に対しては検査がかなり厳しいようです。

僕達と同じ時間に検査を受けていた商人は、トラックに山積みになっていたプラスチック製椅子を全部降ろすように命じられて憤慨していましたが、泣く泣く荷物を降ろしていました。里帰りのスリランカ人が乗っているバスや乗用車も全員が車から降ろされてIDカードと書類のチェック、所持品と身体を検査を受けています。タミール系スリランカ人に対しては特に念入りに行われているようで、僕達がチェックポイントについた時点で既に管理事務所の前に並んでいた人の長蛇の列はいつこうに進まない様子です。

何とか政府軍のゲートを通ると次は1.5km先の国際赤十字のチェックポイントです。ここは拍子抜けするほど簡単に通過できました。遮断機の傍に建てられている事務所の中には白人とスリランカ人らしい人がいましたが外に出てくる事も無く、政府軍発行の通過許可書を確認もせずに手で停まらず行けと合図しています。ゲートの遮断機も上がりっぱなしで、あまりやる気を感じさせません。

さらに1.5km進むと次はLTTEのチェックポイント

です。政府軍のチェックポイントと違ってLTTE兵士達の士気は高いようで、談笑している兵士の姿はありません。目立ちませんが完全武装の兵士が配置されているのに気が付きました。悪ふざけをすると撃たれてしまうような雰囲気があります。

最初に空港のチェックインカウンターと出入国審査場と税関を併せたような場所で入国申請書のような用紙に記入し、入国税のようなお金を支払います。LTTE側からみれば自分達の領土へ入国させるのだから当然の事なのでしょう。僕にはスリランカという一つの国の中に別の行政組織が生まれつつある事を実感させられました。

ここで、僕だけが別棟にある国際機関やNGOのための事務所の中に連れて行かれました。運転手役のチャミンドラは車の中で待機、通訳役のカルナラトネも建物の外で待機です。ここのゲートを通り出来るか出来ないかは僕の説明に掛かっているため緊張します。待機している二人も心配そうにこちらを見えています。

事務所の中で若いLTTEの士官に僕の所属しているNGOの説明と、紛争が終わったら復興の手助けをしたい旨を述べ、幾つかの質問(何を聞かれて、どのように答えたのか緊張していて記憶がありません)に答えると、漸く入国許可書にサインしてくれました。若い士官の落ち着いた態度、綺麗なキングスイングリッシュ、澄んだ瞳が印象的でした。事務所を出てから改めて回りを見渡すと兵士だけでなくLTTE独自の制服姿の警官や、郵便局も見えます。ここまで乗客を運んで来たスリランカ政府側のバスはここで引き返し、代わってLTTE国営のバスがお客を乗せるために入国審査を受けた建物の横に待機しているのも見えます。

入国審査の建物の中では行政組織が生まれつつあるなと感じましたが、若い士官と話をした事と警官や郵便局を見た後では、休戦前からLTTE支配地域内部では独自の行政組織が機能していた事に気が付いて驚かされました。時刻は既に午後12時を少し回っています。はたして午後5時までに通過できるのか不安は募るばかりです。

次回はよいよLTTE支配地域内に突入です。(続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

黄色い光に包まれた幻想的な風景を呆然と見つめていた私はハッと我に返った。いつまでも眺め続けていたかったが、今は一刻も早く宿を見つけなければ、高度4000メートルの林の中で路頭に迷ってしまうのだ。私はきびすを返すと再び来た道を一心に駆け戻った。

もう足がガクガクだった。息を切らしながら花園の広場に戻ると、ウィンが先程の様子のまま座り込み膝を抱えてうずくまっているのが見えた。

何で私一人がこんなに走り回らなきゃなんないのよ～!! 内心、舌打ちしたい気分を抑えて、彼女の肩を揺らすと林の向こうに聳えているオレンジ色の光をまとった央邁勇^{ヤンマイヨン}を指差して見せた。

「ウィン!! 見てみなよ!!」

話しかけても返事をする気力さえ無くしたようにノロノロと無表情に顔を上げたウィンは、夕日に輝く央邁勇の姿を捉えるとパッと表情を輝かせた。

「うわああ～!! 綺麗!! いつから見えていたのかな。私全然気づかなかった」

「ねえウィン、この先に宿は無かったの。私達ここに来るまでに通りすぎて来たみたい。私はちょっと戻って様子を見てくるからあなたはここで待っていて」

少しは気力が戻った様子のウィンに少しホッとすると、私は再び彼女を広場に残したまま洛絨牛場の方向に林の中の道を駆け込んで行った。林の中は道が薄暗くなるので余計に気持ちが焦ってしまう。走りながら必死に考えをめぐらせた。道は一本道のはずなのに、何で宿は見つからなかったんだろう・・・

途中林が切れて、再び小さな広場になっている場所に出た。何気なく見上げた道の上の方に屋根のようなものがかすかに見えていた。「あ!!」山の斜面を登りながら近寄ってみると泥とわらと石で固められたような小さな小屋の屋根から煙が上がっているのが見えてきた。

「あ～!! あそこだあ～!!」

山の斜面には先程の洛絨牛場にあったのと同じよう

な、牛番小屋が建っていた。洛絨牛場からこちらまで道は一本道だが、所々で山の斜面の上段と下段に平行に枝分かれしている箇所があったのだ。先ほど下段の道を歩いていた私達からは、上段の道の上方に建っている小屋は完全に死角に入ってしまう見落とししてしまったと言う訳だ。

「やった～!! 見つけたああ～!!」

嬉しさのあまり思わず叫び声をあげると息を弾ませながら小屋に駆け込んだ。

「你好!! 今夜ここに泊めてもらえる!？」

小屋の中には薄汚れた服を着たパツとしない感じの男が二人、突然飛び込んできた来訪者に驚きの表情を浮かべていた。

「ねえ! 宿はあるの!？」

彼らは我に返ったようにすかさず頷いた。

「いくら?」

「30元だ」

「高いわよ! まけてくれるんでしょ? 私と友達二人なのよ」

「じゃあ 20元でいい」

「良かった! ありがとう～!!」



夕日に輝く央邁勇の雄姿

あわや路頭に迷うところをギリギリで間に合った喜びと安堵感で一杯だった私は、先程の洛絨牛場的小屋よりも宿代が10元値上がりしている事も気にとめなかった。これでやっと落ち着ける。良かった。本当に良かった～

「さっき私の友達がここに来てお茶を飲んだと思うんだけど。香港人の男女二人よ。」

「ああ、来たよ」と男達は頷いた。

彼らの身なりは客観的に見て、これまで出会ってきた村人よりも貧しげだった。

洛絨牛場の宿は無いけど在る・・・なんだか釈然としなかった話の結び目がようやく解けたような気がしてきた。きっと彼らは現金が欲しいのだ。先程洛絨牛場で会った旅行者もアーロン達も、今日の午後にすれ違った旅行者の女性も、道を歩いていると泊まらない

かと呼びかけられたと言っていた。

牛飼の彼らは、馬方など直接観光客にかかわって生計をたてている村人に比べれば現金収入はずっと少ないのだろう。小屋の前を通りかかる観光客を呼び込み、泊まらせるだけで簡単に現金が手に入るのは簡単で美味しい商売だ。こんな小屋で20元とは法外な料金だが、他に泊まる場所のない人間の足元をみて吹っかけているのだろう。わざわざこの小屋を探して歩いて来たというのに、不幸にもたまたま男達の目の届かない下の道を歩いていた私達だけが呼びとめてもらえなかったというわけだ。

男達にお茶をすすめられ、そのまま温かく燃える囲炉裏のそばでくつろぎたかったが、急いで花園広場に戻ってウィン連れてこなければならなかった。ああ～、もう！一人だったら楽だったのに～!! 世話が焼けるったらありゃしない。これだから女は嫌なんだ！

私は自分の性別も忘れて心の中で舌打ちをしながらも、宿が見つけれられた嬉しさに、そろそろ限界に来ている足の疲れも忘れて再び林の中を花園広場に向かって駆け戻った。良かった良かった。安堵感と喜びが込み上げてくる。これでウィンも喜ぶだろう。息を切らしながら花園広場に駆け戻るとウィンに向かって笑顔で叫んだ。

「ウィン!! 見つけた! 見つけたよ!! 私達やっぱり通り過ぎていたの!!」

「どんな宿? 綺麗!？」

「ううん、洛絨牛場のと同じような牛番小屋」

私が答えにウィンはとたんに顔を曇らせた。

「ええ～、ちゃんとした宿じゃないのお～！」

まったくこの期に及んで何言ってるんだろう。彼女は自分の置かれている状況がわかっているのだろうか。

「小屋の人はどんな人？」

「男の人が二人」

「ええ～!! 私達は女だよ! 男しかいない宿になんて泊まれる訳ないじゃん!!」

私は少し驚いてしまった。先ほどは必死だったので、そんな事は考えもしなかったのだ。

だが、必死に走り回って見つけてあげた宿に不満ばかり言っているウィンには腹が立った。いったいここを何処だと思っているのだろう。綺麗な宿にしか泊まりたくないのならそれなりの観光地へ行けばいい。アロン達と稲城に帰るか、一人で沖古寺に泊まれば良かったのだ。私は一緒に来てくれと頼んだ覚えはない。

「彼らはお金が欲しいだけよ。今更ゴチャゴチャ言

ってる暇なんか無いのよ!! それじゃあ、このままここに寝るつもり!? 冗談じゃないわ」

いいかげん、ムツとしてきた私は有無を言わずにその場に置いてあった自分の大きなザックを背負い上げ小さなザックを胸にかけると歩き出した。朝からあなたの三倍以上の荷物を背負って歩いてきた私が、どれだけ走り回ってあの宿を見つけてあげたと思ってるの!? 全く女って面倒だ。再び自分の性別を忘れて心の中で毒づいていた。

「だって、さっきアロンはいい家だって言ったのに・・・ねえ、他に別の宿があるんじゃない？」

ウィンはまだ未練がましくもっと綺麗な宿を探したいなどと言っている。私は苛立ちを押さえきれない口調でウィンに言った。

「あんた二日も一緒にいて、まだアロンの性格わかってないの!？」

アロンはね、自然の中で暮らす土地の人間や生活が好きなのよ!! どんな家だって招かれてお茶をご馳走になったりしたら良い家だって言うわ! これ以上いくら探したってこんな山奥に普通の宿なんてある訳無いでしょう!!

「だったら、さっきの洛絨牛場の小屋の方が良かった。あっちは女の人だもの」

この言葉には思わずカツと頭に血がのぼった。

「私はあそこの小屋でいいって言ったのに、誰が他の宿を探したいって言ったのよ!! あんたは疲れたって座ってただけだけど、私がどれだけ大変だったと思ってるの!! 私だって疲れたわ! これ以上もう動けないわよ!!」

私の怒りを感じて抵抗力を弱めながらも、ウィンはまだ男だけの小屋なんて嫌だとグズグズ言っていた。

「彼らはお金が欲しいだけよ!! 私達には何もやしないわ!!」

「友達を連れてきたわよ!!」

先程の小屋に戻り男達が入れてくれたお茶を飲みながら、私達は囲炉裏端に座ってポツポツと会話をした。先ほどああは言って強引にウィン連れてきたものの、私もこの男達に対してどこか好印象を抱けずにいた。ウィンの危惧しているような危機感は感じられなかったが、旅行者から金銭を得ようという心持ちが男達から素朴さを失わせているからなのだろうか。だがもう選択の余地もない。ただ一晩ここで眠るだけだ。

「私達はどこに寝るの?」と男達に尋ねると、少し離

れた場所に建っている離れのような小屋に連れて行かれた。「えええ～!? ここに泊まるのお～!?」小屋をみたときに私達は思わず声を上げてしまった。

洛絨牛場で連れて行かれた離れの小屋は物置小屋だったが、こちらは完全に廃屋だ。屋根と扉の一部は朽ち落ちて、すでに半壊している状態なのだ。これでは日が落ちれば急激に冷えこんでくるであろう外部の気温を遮断することもできないし、雨が降れば壊れた屋根から雨水が吹き込んでくるだろう。こんな場所をあてがうだけで一人30元も吹っかけていたとは呆れてしまう。

30元といえば私が康定で泊まった宿の値段と同じだった。バスターミナルの目の前という利便性の高い場所に在る宿のシングルルームだ。セミダブルのベッドにテレビ。共同ではあるがお湯の出るシャワーもあった。地方の田舎町といえこの垂丁から比べれば康定は大都市である。

貨幣価値の落差も含めて考えれば、彼らはどれだけ法外な値段を吹っかけているのだろう。改めて垂丁の村人の心持ちが金銭欲で荒んでいるのを感じ、思わず心がスッと冷えるような気分になった。

「こんな場所には泊まれないわ。あなた達の小屋の方に泊めてよ」

だが、男達は首を振った。もういい。たった一晩だけのことだから。私も疲れきって投げやりな気持ちになっていた。男達が去っていくと、朦朧とした様子でウィンが言った。「私、本当に疲れた。お願い、少し眠らせて・・・」

私がザックからシュラフを取り出してウィンに与えると、使い方を知らないというウィンに中にもぐるように説明した。糞虫のようにシュラフにくるまったウィンは「こんな風に寝るのは始めて。気持ちいいね」と少し笑顔をみせるとすぐに眠ってしまった。

それにしても、こんな宿を友人に勧めるなんてアロンのお人好しにも呆れてしまう。さっきは腹を立てていたが、シュラフにくるまって眠っているウィンを見ていたら急に可哀相になってしまった。すぐにおかしな冒険に首を突っ込みたがる私とは違い、彼女は普通の旅行好きな女の子なのだ。彼女の言っていることは決して我儘ではなく、当たり前な事ばかりだろう。たまたま私と出会ったために、こんな目にあって・・・

そう思ったとたん、急にウィンが言っていた言葉が気になり始めた。先程は走り回った労力を否定された怒りと疲れで聞く耳をもたなかったが、私はいったい何を根拠に大丈夫だと決めつけているのだろう。あんなに嫌がっていたウインを無理やりここに連れてきて

万が一何かあったりしたら、私は自業自得だろうが彼女に対してどう責任をとればいいのか。そう思った瞬間、私の心は決まっていた。

表に出ると辺りは薄桃色に染まり始めていた。外で家畜の世話をしている男達に「友達は眠ってしまったから、一人でちょっと散歩してくるわ」と声をかけると、傍にいた男が「もうそろそろ日が暮れるから気をつけてな」と言いながら、さりげない様子で私の腰に手を触れた。

その瞬間私の頭の中ではピー!!! と激しく警報機が反応していたが、気にとめない様子のままその場から歩き去るとゆっくり小さな広場を横切り林の中に入った瞬間、私は再び猛ダッシュで洛絨牛場の方角に走り始めた。「早く! 早く! 早く!!」暗い林の中でぬかるみに足をとられ、木の根につまづきながら、息の続く限りできるかぎりの速さで。いったい今日ってどういう日なのよ～!!!

朝からの行動を考えると、何故今自分が林の中を走れる体力があるのか自分でも判らなかった。これが火事場の馬鹿力という奴だろうか。泣き出したい気持ちで洛絨牛場まで駆け戻った時にはあたりは既に薄暗くなりかけていた。真っ直ぐ先程の牛番小屋に駆け込むと、老女と女の子に赤ちゃん達が暖かく燃える囲炉裏の炎に照らされてオレンジ色に顔を光らせ団欒している様子に一気に心の緊張が緩む。

あ～、こっちだったら安心して泊まることが出来る。

私は家主の老女に向かって言った。「お願い。やっぱり今晚泊めてください!!」

しかし老女は首を振った。

「何で!? さっきは良いいって言ったのに!!」

「管理人が来る」

先程出会った制服の男の言葉が脳裏に甦り、だんだんと事情が飲み込めてきたような気がした。だが今はそれで諦める訳には行かないのだ。私は必死に頼み込んだ。

「今はこの先の小屋にいるのだけれど、あそこは男しかいないのよ。怖くて泊まれないわ」

それでも老女は首を振る。

「男はスケベでしょ? 私達女でしょ? 危ないでしょ?」

少ない中国語の語彙でたどたどしくも必死に話す私の言葉を女の子は面白そうに目をキラキラさせながら聞いていた。暫く頼み続けると、とうとう老女は指を三本立てて言った。「30元だよ」え? さっき来た時は

10元だったはずじゃ・・・

「二人で30元でしょ？ いいわよ」

私がかまをかけたが、老女は首を振り一人30元でなければ泊まらせないと。人の弱みに付け込んでポッタクリとは全く・・・だが状況はすでにお金の問題ではないのだ。とにかく泊まらせてもらえるだけでありがたかった。料金の交渉は後でウィンにやらせよう。「判ったわ。それじゃあ今から友達を連れて戻ってくるからね」

そういい残すと私は再び林の中に走り込んだ。この後荷物を担いで再び戻ってこなければならぬのかと思うとウンザリだった。最初からここに泊まっていたら、何の問題もなかったのに。そう思うとウィンが恨めしい。

すでに林の中はかなり暗かった。完全に日が暮れきる前に戻ってこないとな林の中など歩けなくなってしまう。

「早く！ 早く!!」いずれにしても走るのはこれで最後だ。安心して今晚泊まれるのだ。自らを励ましながらかクガクの足をよろめかせながら林の中を走った。今日一日でどれだけ無駄に走り回ったのだろう。

息を切らせながら男達の小屋に戻るとゾッとした。二人だと思っていた男が三人に増えていたのだ。後から加わった少し年若い男が興味深そうに私の顔を見てニヤニヤしていた。私は平静を装うとすすめられたお茶を断って「友達の様子を見てくるから」と離れに駆け込み、熟睡しているウインを荒っぽく揺すった。

「ウイン！ ウイン！ 起きるのよ!! 早く荷物をまとめて!! ここを出るよ!!」

深い眠りを突然妨げられ何が起きたのかわからずボンヤリしているウインをシュラフから追い出すと、乱暴に丸めてザックの中に突っ込んだ。早く行かないと日が暮れて歩けなくなってしまう!!

「ウイン!! 早くして!!」悲鳴のような声を上げながら最大限のスピードで荷物をまとめ

ックを背負うと表に飛び出した。様子を見るためか外に出てきた男に適当にでっち上げた理由を告げる。

「ごめんなさいね、私さっき散歩に行ったら管理人に怒られちゃったの。ここに泊まることは出来ないから沖古寺に戻りなさいって」

男はせっかくの金づるを取り逃がすことになりそうだと慌てた様子で私に尋ねた。

「どこで管理人に会ったんだ？」

「洛絨牛場よ。さっき散歩に出た時洛絨牛場まで行ったの。管理人に見つかって何処に泊まるんだと聞かれたからこの事を話したら怒られちゃって、ここに泊まるのは許さないから沖古寺に行きなさいと言われたの」

「ここに泊まるって管理人に言ったのか？」

「そうよ。だから私達沖古寺に行かないと、ここに管理人が来て怒られるわ」

事前に考えていた訳でもなかったのに、良くまあスラスラとうまい嘘が言えたのものだと自分でも感心するくらい滑らかに喋っていた。そう言われては男達も引き止めることも出来ずに、釣り上げた大きな魚に糸を切られたような顔をしてぼかんと私達を見送っていた。

再び大きな荷物を背負いヨロケながら最大限のスピードで林の中を抜け、私達がほうほうのていで洛絨牛場にたどり着いた時には辺りはすっかり暗くなっていた。

(続く)



ルオロンニュウチャン
亜丁・洛絨牛場の放牧者の小屋 2004年7月撮影

アフリカとの出会い (32) アフリカの日々「変わらない家族の姿」

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

日本にケニアから戻ってきて、早や6年もの月日が経とうとしている。その間に、私は2人の子供に恵まれた。子供を持つことで見えてきた世界も沢山ある。生活だけでなく、考え方や価値観もそれに伴って随分と変わってくるようになった。そういう変化を経ている自分が、改めてケニアでの2年間を振り返るとき、彼らの「家族の姿」がそのまま今の日本のお手本ではないかと思えてきて仕方がないのである。

アフリカは日本から見ると、経済的には発展途上の国々であることは否めない。1日を1ドル以下で生きる人々の割合が40%を超え、失業率は50%以上と言われるが、その統計は正確さを欠いているだろう。実際には仕事がない人であふれている。

1963年のケニアの独立後、人口は増加しているが、子供の数は減少傾向にある。それは、NGOや国連が子供の数を減らすべくさまざまな家族計画のプロジェクトを実施した結果というよりは、各家庭の経済的要因が大きい。統計によると2007年度でケニアのGNP比は7%の経済成長率を示している。この数字がすべての人の生活が向上しているとはもちろん言えない。

子供数が減少傾向にあるという事実、私はケニアの経済や人々の生活レベルが上昇してきているのではないかと考えている。

ケニア人の夫の家族を例に挙げてみると、祖父母世代(現在80歳以上)、祖父は奥さんが2人いて、1人目の奥さんに子供が15人、2人目の奥さんに子供が11人、合計26人の子供がいる。彼の父母世代(現在50歳代)になると、父は奥さんが1人で、子供が11人(そのうち3人死亡している)、そして彼の世代になると、私たちは今のところ2人の子供だ。

子供数の減少は、多くのケニアの家族で見られる傾向である。それは増え続ける人口を減らそうとした政策やNGOや国連のインセンティブに反応したというよりは、それぞれの家庭が乳幼児の死亡リスクを考えて行動した結果であり経済状況を判断した結果であり、或いは1人当たりの子供にかかる教育費を考慮した結果であるとする。

まだまだ問題があるとはいえ、ケニアの人々にとっては、経済・医療・教育のさまざま分野で質の向上があり、沢山の子どもをもうけるよりは、より少ない子どもに、より多くの教育費を多くかけるという選択へと変化してきていると思う。特にナイロビをはじめとする都市部では少



子化傾向がどんどん進んできているように感じる。といっても平均して3人はいるのだが。

平均の子供の数が独立後45年の間に減少していく中で、変わらないのが人々の社会の子供に対する姿勢や眼のように思う。ケニアの子育て世代は、そういう社会や地域の中で、異年齢・異民族・そして外国人が多く居る中で、子供を育てる。顔や言葉、文化などさまざまなものが交じり合う中、「子供」は、沢山の人の目や手で育てられていく。日本もそういう時代があったし、今でもそういう地域社会が色濃く残る場所もあるだろう。

しかし、最近のニュースを聞くと家庭内暴力(DV)、ニグレクト、介護疲れ、孤独死など、地域社会が崩壊していることを示す言葉がよく聞かれる。少なくとも、今のケニアでは聞かれない。戦後の経済発展を手に入れ、日本は豊かになった。

しかしその豊かさの先にある今の日本の生活が、在日アフリカ人に聞いてみても、アフリカをはじめ発展途上国が目指しているそれではないことを、残念に思える。

中国映画「四川のうた」(監督: ジャ・ジャンクー)

第19回オスロ・フィルムズ・フロム・ザ・サウス映画祭の国際批評家連盟賞を受賞

於: ユーロスペース(渋谷) <http://www.eurospace.co.jp/>
渋谷区円山町1-5(渋谷・文化村前交差点左折) ☎03-3461-0211

上映期間: 4月18日~5月8日(金)

上映回: 11:00 / 13:20 / 16:00 / 18:30

一般当日¥1,700(税込)

ジャ・ジャンクーは1970年に山西省の片田舎で生まれたという。まだ20代だった10年程前に彗星のように現れた。彼のどの作品も次々に大きな賞を受けている。まだ若い気になる中国の映画監督なのだ。この映画は彼の最新作品である。

50年にわたり中国成都の、機密機関であった巨大国営工場「420工場」。2007年、その歴史に幕が降ろされた。映画は最初から最後までその工場にかかわった個々の労働者たちが、それまでの日常の「喜怒哀楽」をとととと語るだけだ。

見始めたときの場違いなところに来てしまったような印象が、彼らそれぞれのささやかなエピソードが繋がり始めると、次第に映画の中に引き込まれて行った。

彼らの話の合間に、恐ろしいほど巨大な重機が占めていた、非人間的な工場が少しずつ取り壊されて行き、最後はまっ平らな瓦礫と化す。そして思う。人は彼らばかりではなく誰しもが、意図するにせよしないにせよ、大きな時代のうねりと共に生きているのだと。「消えてゆくものもあるが、人はそこでやはり生きてゆく」深い感動が静かにこみ上げてきた。(田井)

中国の若き巨匠ジャ・ジャンクー 奇跡の軌跡をたどる

5月23日(土)~6月5日(金) 於: ユーロスペース(渋谷)

一般・大学生1400円/会員・シニア1000円

*『四川のうた』前売券・半券提示で1200円

「四川のうた」公開記念。27歳で衝撃のデビューを飾り31歳で世界の三大映画祭(ベルリン、カンヌ、ヴェネチア)を制覇、36歳の若さでヴェネチア国際映画祭金獅子グランプリを受賞した。デビュー作から前作『長江哀歌』旧作5作品と劇場初公開の短編2作品を一挙上映。

■上映スケジュール

⇒5月

23日(土) 15:55『プラットホーム』、18:40『長江哀歌』

24日(日) 15:55『一瞬の夢』+『河の上の愛情』

18:25『世界』

25日(月)、26日(火) 15:55『プラットホーム』、

18:40『一瞬の夢』+『河の上の愛情』

27日(水)、28日(木) 15:55『青の稲妻』+『私たちの十年』

18:10『プラットホーム』

29日(金) 15:55『世界』、18:25『青の稲妻』+『私たちの十年』

30日(土) 15:55『一瞬の夢』+『河の上の愛情』

18:15『プラットホーム』

31日(日) 15:55『青の稲妻』+『私たちの十年』

18:25『長江哀歌』

⇒6月

1日(月) 15:55『世界』、18:25『青の稲妻』+『私たちの十年』

2日(火) 3日(水) 15:55『長江哀歌』、18:25『世界』

4日(木) 5日(金) 15:55『一瞬の夢』+『河の上の愛情』

18:25『長江哀歌』

'わんりい' 会員と関係者の皆様へ

バーベキューのお誘い

'わんりい' の皆様、NHKラジオ講座でお馴染みの京劇俳優・殷秋瑞さんと一緒に新疆風味のバーベキューは如何?

2009年5月16日(土) 10:30~14:00頃

▶5月13日夜の天気予報で傘マークが付いた時は中止。当日になって雨になった場合は町田市大地沢青少年育成センター・大地沢で開催。

於: 相模川・小倉橋下の河原(相模川上流)

● 集合場所: 現地

・現地10:00頃までにお出掛けください。

・車は河原に自由に駐車できます。

・尚、車の運転をされない方は鶴川駅前マルエツ前

9:00集合(時間厳守)

● 参加費: 1500円

● 持ち物: 皿、お椀、箸 ▶必ずご持参ください。

● 申込み: 5月13日までに下記へ

E-mail: wanli@m2.ocv.ne.jp

TEL/FAX: 042-734-5100(田井)



'わんりい' 3月号で紹介の、ドキュメンタリー映画「長江に生きる」~乗愛(ビンアイ)の物語~ (監督☆フォン・イエン)の追加上映が決まりました。

● ユーロスペース 5月9日(土)~22日(金)連日10:00

● ポレポレ東中野(JR東中野北口及び西口徒歩2分)

5月30日(土)~6月12日 連日13:00/16:00

● シネマート六本木(地下鉄六本木駅3番及び5番徒歩2分)

6月6日(土)~19日(金) 連日10:45/13:10

6月20日(土)~26日(金) 時間はお問合せください。

☎03-5416-7711

ケニア共和国のたくましいストリートチルドレンたち

「チョコラ!」監督: 小林茂 音楽: サカキマンゴー

於: ユーロスペースにて上映

5月9(土)~5月22(金) 12:25/14:30/16:35/18:40

5月23(土)~5月29(金) 10:20/12:25/14:30/16:35/18:40

5月30(土)~6月5(金) 10:20/21:10

▶当日: 一般1700円 シニア: 1200円

【5月の定例会とおたより発送日】

● 定例会: 5月14日(木) 13:30~ 田井宅

● 6月号おたより発送: 6月1日(月) 13:30~田井宅



麻生市民館利用団体による楽しい催しがいっぱい！

恒例！ 2009あさおサークル祭 5月23日(土)・24日(日)
於：麻生市民館全館



小田急線・新百合ヶ丘駅北口徒歩3分麻生区総合庁舎内。催し物の詳細は同封パンフレットをご覧ください。

'わんりい' の催し TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル演奏会 参加無料

●5月23日(土) 於：大会議室 14:30～16:00

馬頭琴の本場・内モンゴル省都フフホト市とモンゴル共和国首都ウランバートル市での演奏で大喝采を受けている日本人のみによる馬頭琴アンサンブルの実力を全て披露！

皆様のご参加と声援をお願いします

演奏：永瀬征博(団長) 西郷美炎子(コンサートマスター) 高木和恵 大江千晶 池谷禎俊
チ・ブルグド(音楽総監)

演奏予定曲：・賛歌(モンゴル民謡)・藍色の子守唄(チ・ボラグ作曲)・回想曲(チ・ボラグ作曲)
 ・ロマンス(二重奏)(アルタンホイグ作曲)・大草原(チ・ボラグ作曲)
 ・風と空のうた(独奏)(西郷美炎子作曲)・白い風(独奏)(西郷美炎子作曲)
 ・リベルタンゴ(A・ピアソラ作曲)・セレンゲ河(五重奏)(アチラト編曲)など13曲



ハートフル2009モンゴル民族文化基金

第7回チャリティコンサート

中国各地のモンゴル族の子どもたちに奨学金を！！
多くの皆様の温かいご支援をお願いします。

【出演】

歌手：新垣勉、井上あずみ、エレクトーン：神田将、
フラメンコ：小林伴子、歌手：芹洋子、二胡演奏：チェンミン、馬頭琴演奏：チ・ブルグッド など

2009年6月11日 午後6時開場 7時開演

於：北とピア さくらホール (北区王子1-11-1(JR王子駅、地下鉄南北線王子駅 1分) ☎：03-5390-1100

- 前売り3500円 当日4000円 中学生以下2000円 (全席自由)
- 申込&問合：03-3914-7208(モンゴル民族文化基金) E-mail：muss@Live.jp

二胡の奇才

ジョージ・ガオ(高韶青)リサイタル

中国伝統曲を中心にその卓越したテクニックと情感溢れる演奏をじっくり堪能していただきます。竹馬の友シュウミンとの息の合った二胡二重奏もお楽しみに。

2009年6月14日(日) 14:00開演 13:30開場

於：HAKUJU HALL(代々木上原)

前売り4,500円 当日5,000円(全席指定)

【出演】ジョージ・ガオ(二胡) 張林(揚琴) シュウミン(二胡)

【予定曲目】

二泉映月/洪湖人民の心願/月夜/秦腔主題随想曲/蒙風 ほか
企画・制作・主催：ラサ企画

■予約・お問い合わせラサ企画：TEL/FAX 03-5748-3040

姜小青～『弦之縁』フレンドリーコンサート～

2009年5月9日(土) 16:00(開場15:30)

於：大倉山記念館ホール

(横浜市港北区大倉山二丁目10番1号
東急東横線「大倉山駅」より徒歩7分)

共演者：西本梨江(ピアノ)
馬平(中国木琴・打楽器)

料金：¥4,000(前売り) ¥4,500(当日)
全席自由

主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

申込：名前、住所、電話番号、チケット枚数を明記の上、なるべくFAX、
又はE-Mailにてお申し込みを。

●FAX：045-313-5188 E-Mail：xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp
TEL：080-1304-7347(お問い合わせ及び電話受付)

